

〈修士論文要旨〉

レバノン、ティール出土ガラスに関する 実験考古学的研究

島 田 守*

1. はじめに

現在、私たちが日常で何気なく使っているガラスのコップ、実はおよそ2000年間もほとんど変わっていない技術で作られている。今でもガラス工房に行けば、職人が竿に息を吹きこんで、形も大きさも様々な作品を作っているところを見ることができる。しかし、これほど長い歴史の間使われてきているにもかかわらず、その起源や初期の技法、設備・道具の実態などはほとんど分かっていない。分かっているのは吹きガラスがあったというくらいのもので、ではそれが実際にどのようにして作られたのか、残念ながらそれを示す考古学的な発見はほとんどないのが現状である。完成された作品は世界中の多くの博物館や美術館で見ることができるが、それらを作った設備や道具、人間については知ることができない。

しかしながら、吹きガラスの技術はほとんど完成された技術ゆえに、現代のガラス工芸から多くのヒントを得ることができる。そこから得たヒントと、実物の詳細な観察を繰り返し行うことで、徐々にではあるが、研究成果を出すことができる。私は、単に実物を手にとり眺めるのではなく、実際に自分の手で作ってみることからヒントを得ようという研究方法を用いている。単に観察するだけでは想像に終わってしまうが、実践的な作業を体験することで流れ作業の中に意味を見出し、なぜそのような形になったのか、なぜこういう作り方をするのかといったことを説得力をもって説明することができる。当然のことながら、できる限り設備を古代の水準に合わせ、現代の工芸用に発達した特殊な道具などの使用をやめて製作実験をする必要がある。それには考古学的観点からの研究にも目を向けなければならない。本論「レバノン、ティール出土ガラスの実験考古学的研究」は、実験が主ではあるが、まずそういったこれまでの考古学的研究を踏まえた上で行った総合的な実験研究である。

2. なぜレバノンか？

吹きガラスの起源は今のところ地中海東沿岸地域であろうと言われている。そして時代は紀元前1世紀半ば頃。これらの地域がローマ帝国領の支配下にあった時代である。それゆえ古代の吹きガラスはよく「ローマン・ガラス」と言われる。吹きガラスが発明されたことで、時間をかけずにしかも大量に生産が可能となり、瞬く間にローマ帝国領を通じて各地へ拡大していった。レ

平成16年度 *文学研究科文化財史科学専攻

バノンはその発祥の地に非常に近く、あるいはその可能性もある地域である。非常に幸いなことに、過去3年間参加することができた奈良大学によるレバノン発掘調査において、吹きガラスが発明されていまだ2、300年しか経っていない時代のものと思われるガラス器の発見に出会うことができた。それが本論で取上げている「化粧瓶」と「水差し」である。吹きガラス発祥の地に時代も場所も近い地域で発掘されたこれらのガラスの技法を知ることができれば、いまだに鮮明な吹きガラスの実態に少しでも迫ることができるのではないかと考えた。

3. なぜ実験考古学か？

実際、一見単純そうに見えたこれらのガラスは現代では考えられないようなやり方で成形されていることが本研究で分かった。現在ばかりでなく、古代からも当たり前のように使われている道具、「ポンテ」の使用痕が見つからず、それを使わない方法を考えなければならなかった。このような状況では実験考古学的研究がもっとも成果を発揮できると考える。

ポンテとは吹きガラスの口を成形するのに必要な道具で、熱いうちに成形しなければならないガラスを手の代わりになって支えるものである。数少ない事例によると、これら出土ガラスの時代にはすでにポンテは存在していたが、これらには使われなかったようである。現代の感覚からいえば、むしろポンテを使わなければ作れない形をしている。

実は初期吹きガラスの多くにこれと同じ特徴が見られるのだが、「何かでガラスを掴んで口が成形された」というほどのことしか分かっておらず、実際にどのようにして作られたのか示した研究はない。

このような現状において、同じ特徴を持つガラスを実際に観察し、製作実験と合わせて研究を重ねるうちにようやく1つの可能性を示すことができた。最大の課題は、「ポンテを使わずにどのように口を成形したのか」であるが、その方法も、1つのガラスを作る工程の中の一工程でしかない。つまり、全体的な流れにあった技法でなければ、それが使われていた可能性は低であろう。ましてや吹きガラスはガラスが冷めるまでに形を決めなければならない上、スムーズな工程でなければ吹きガラスの意味がない。本研究では技術的な観点からと、考古学的な観点から古代の技法に取り組み、具体的な形で可能性を示している。

以上の技術的問題のほかに、古代ガラスの研究において、全く実態がわかっていないものにガラス窯が挙げられる。率直に言えば道具のことも、そして設備のことも分かっていないのが現状である。ガラスを「成形する」技法ではなく「熔かす」技法であるが、ガラスの器を作るためにはこれら2つの技術が備わっていなければならない。考古学的には、基礎の構造を示す発見例が数例あるが、上部構造を直接示すものは現段階ではない。間接的には、ローマ時代のランプに描かれたガラス窯がある。2つ目の研究として、これを基に実際に窯を作って木炭によるガラスの熔解を試み、ガスも電気も無かった時代の窯の能力を知ることができた。

前述した出土ガラスの研究を「製作実験」とし、そしてこのランプに描かれた窯を基に、古代の窯の能力を知るために行った研究を「熔解実験」として、それぞれについて実験研究を行っているが、いずれの研究にも、広い視野でもって取り組んだ。本研究で示しているのはあくまで数

ある可能性の中の1つであるが、まだまだ不鮮明な古代ガラスの実態を解明するに当たって、実験考古学的研究が持つ可能性と有効性を示すことができた。